



「ちょっと食べ過ぎたねえ。苦しいかも」

「まったく、どれだけ食べるのよ。太っても知らないからね」

「そういう誰かさんだつて結構食べてたと思うけど？」

「うるさいわね」

「確かにちょっと食べ過ぎましたね」

確かに食い過ぎた気はする。ケイと美月だけじゃない。マリナまでもがちょっと苦しそうだ。想像通り、L2の店と変わらない美味しさで、しかもメニューはこっちの方が充実している。他のステーションの店も機会があれば行ってみたいものだ。地球にも店はあるのだろうか。これならば地球でも十分に商売ができそうだが。

ターミナルビルの中央にある昇降シャフトは、地下の出発、到着ゲートまでつながっている。俺たちはレストランフロアから一気に出発フロアまで降りる。ゲートに着くと、そこにはあのシャトルが駐機している。オライオン社の最新型シャトルTS5-300型、忘れもしない因縁の機体だ。ここまで乗ってきたシャウラとは異なり、地球の気圏を飛ぶように設計されたこの機体は、すらっとした流線型をしていて、小さいが翼もある。大きさは違うが、スタイルはこちらのほうが、ずいぶんスマートだ。しかし、この機体にはちょっとトラウマがある。附属高入学式当日これに乗って、間違えばあの世行きになっていたかもしれないのだから。見れば美月もちよつと考え込んでいる様子だ。

「また、あんとと、これに乗るのよね」

美月が俺を見て言う。

「ああ、何が言いたい？」

「別に。あんたのこの一年の行いが良かったことを祈るだけよ」

「だな。俺もおまえの行いの良さを祈るよ」

「私は……、なんでもないわ」

美月は何かを言いかけて、それを飲み込んだようだ。その判断は正しい。あの時も、今、たぶん美月が口にしようとした、その言葉を言うたびに、俺たちには次々と不幸が降りかかった

のだから。神様なんてものがあるならば、少なくとも俺たちは二人とも、あまり受けが良くないらしい。最近も、実習中の事件の際に、同じようなことがあったばかりだ。さすがの美月も学習して、その後は実習中でも軽口は叩かなくなった。

「そう言えば、二人にとっては思い出深い機体なんじゃないか？」

ジョージがまた余計なことを言う。

「思い出深い、と言うよりはトラウマだけだな」

「そうね。とりわけ、あんたと一緒だと悪夢がよみがえるわ」

「それは俺も同じだが」

という会話になってしまっているのはわかっている。それに、俺たちにはこの話を拒絶したい理由がもうひとつあるわけで……。つまり、記憶から消しておきたい一言とか……。

「お二人とも、大変な目にあったんですから当然ですよ。大丈夫ですか？」

マリナは心配してくれるのだが、それはそれで、逆にちよつと気を遣うわけで。

「宇宙気象局の短期予報だと、大きな太陽活動はなさそうだし、今回は大丈夫じゃない？」

「当然よ。あんなことが何度もあったらたまつたもんじゃないわ」

たしかに美月の言うとおりだ。あんな事故はここ数十年なかったはずだ。どうして俺たちの時に、という恨み言も言いたくなる。まあ、今回はお客さんに徹して、ゆつたりと旅を楽しもうじゃないか。

やがて、搭乗開始のアナウンスがあつて、俺たちはゲートに向かう。この便は2クラスのシートなので、ファーストクラスの乗客が乗り込むのを、指をくわえて待つこと数分。俺たちもゲートを通つて搭乗となる。ここでもチケット情報はD Iユニットとゲートの機器との間で自動的にやりとりされる。チェックがOKにならないと通過はできない。そして、真つ先に俺がゲートを通ろうとしたとき、いきなりアラームが鳴つてゲートが閉じた。

「お客様、少々お待ちください」

係員がゲートのパネルで情報をチェックしている。

「中井ケンジ様ほか5名様ですね。申し訳ございません。ちょっとこちらのカウンターでお待ち願えますでしょうか」

係員はそう言うと、ゲート脇のカウンターの方に俺たちを案内する。何も悪いことはしていないはずだが、ちよつと不安になってしまうのは、心にやましいことがあるからだろうか。いや、そんなはずはない。しばらくすると、シャトルの方からアテンダントとおぼしき女性がやってきた。

「中井様、星野様、沢村様、クレア様、エイブラムス様、エドワーズ様の6名様ですね。お待ちしております。機長がご挨拶したいと申しております。お手間をおかけしますが、操縦室までお越し願えますでしょうか」

「機長さんが・・・ですか？」

いったい機長が、アカデミー基礎過程のひよっこたちになんの用だろうか。俺たちは、おそろおそろアテンダントの後についてシャトルに搭乗し、機長室に向かう。

「もしかして、アカデミーの先輩とかだったり？」

「なによ、先輩風でも吹かそうってのかしらね」

ケイと美月はそんな会話を小声でしている。

操縦室は、セキュリティ上の理由から航行中は乗客立ち入り禁止である。だが、駐機中は機長の許可があれば立ち入りできる。まあ、出発前の忙しい時間帯に乗客の見学許可を出すようなクルーはまずいないから、乗客が立ち入ることはほぼないのだが。操縦室の中は、見覚えがある雰囲気だ。なんとなく、去年の出来事がよみがえってくる。そう、あの時のことも・・・見れば美月も同じようなことを考えているようで、目が合った瞬間に赤面して顔をそむけた。

「皆さん、わざわざお越しいただいてすみません」

機長席に座った男性がこちらを振り向いて言う。

「あ、あなたは・・・」

「はい。その節はお二人には大変お世話になりました。本来なら、こちらから出向くところ

ですが、なにぶん出発前で取り込んでいたので、こんな形で失礼します」

そうだ。この顔には見覚えがある。あのとときの機長だ。俺が操縦室に行ったときは、もう意識が無くて話はしていないが、顔は覚えている。

「復帰されてたんですね。よかった」

「いや、本当にお二人のおかげです。治療が間に合ったおかげで、こうして後遺症もなく、仕事に復帰できました。本当に何とお礼を申し上げたいかわかりません。ありがとうございます。ありがとうございました。その後、お会いする機会もなくて、今回、乗客名簿に皆さんのお名前を見つけたので、無理にお願いしてしまいました」

「いえ、本当に幸運が重なったんだと思ってます。きっと機長さんや他の乗客の皆さんが、とても幸運だったんじゃないかと」

「そうですね。でも、あの後ははいぶん大変だったでしょう。私が星野さんを巻き込んだことで、色々ご迷惑をかけてしまったこともお詫びしないとイケません」

「そんなこと、気にしないでいいわよ。ちょっとした有名人気分だったし、ああいうのも悪くないわ」

「そう言っていたけると少し気持ちが楽になります。さて、そろそろ仕事に戻らないといけないので、これで失礼します。皆さんにはお礼の気持ちをこめて、会社からファーストクラス席を用意しています。ゆっくりと旅を楽しんでください」

静止軌道から下は非常に混雑していて速度制限があるため、フライトは通常軌道で6時間以上になる。その間、窮屈なエコノミーシートを覚悟していたのだが、これは思わぬプレゼントだ。俺たちは機長に礼を言うとアテンダントに案内されて、最前部の豪華なシートに座る。

「すごい、ふかふかだよ、これ。それにフラットになるんだ」

ケイは、早速シートを倒して遊んでいる。

「あんたね、何浮かれてるの。恥ずかしいわね。そんなにファーストクラスが珍しい？」

「だってさ、ファーストなんて、学生の身分じゃ乗れないし。楽しまなきゃ損だよ」

俺はどちらかと言えばケイに同意したい。たしかに前回もちょっと事情があってファーストに、つまり美月の隣の席に座ることになったのだが、美月とは違って、最初からファーストクラスのチケットなんて絶対買えないから。

「なんだか豪華だよ。ケンジと美月に感謝だね。これは」

「そうですね。なんだか優雅な気分です」

そんな会話をしている間に、出発時刻。間もなくボーディングドアが閉まって、おきまりのアナウンスと映像が流れ、それからシャトルはゆっくり動いてカタパルトへ移動する。地球行きシャトルは他と違って、いきなりフル加速で射出はされない。様々な衛星やら、大昔にばらまかれたデブリやら、宇宙船やらで大混雑している地球軌道は、昔ながらの軌道速度に制限されている。シャトルは一旦、静止軌道に近いドリフト軌道に移動して、指定経度近くまで移動したあとで、エンジンを使って減速し、中軌道から低軌道へ落ちていく。最後に高度400 Km程度の低軌道で、減速ステーションの磁場に捉えられ、その高度で地球周回軌道に乗った後、目的地に向けて大気圏に突入するのである。この一連の流れには6時間ほどかかる。もし、着陸地が混雑していたりすれば、しばらく低軌道で待機することになり、地球を何度か周回することになるから、場合によっては1、2時間余計にかかる可能性もあるのである。この宇宙時代にあっても、地球はやはり特別な場所なのだ。特に、恒星間航路の船の乗員たちにとっては、地球周辺航路はタイムスリップでもしたような感覚になるという。

「ここからが長いよね。食事パスして寝ていたい気分だわ」

「えー、ファーストクラスの食事をパスするの？」

「べつに、そんなに上等な食事じゃないわよ。さっき食べたのと比べたら、がっかりするか

ら」

「そりゃ、美月はそうかもしれないけどさ。私は話のネタに食べておきたいかな」

「そもそも、さっき食べたところじゃない」

「たしかに、今はちよつと入らないかもしれないけど」

ケイは自分の腹を、ぼんつと叩いてため息をつく。地球行き所要時間の三分の一は静止軌道からドリフト軌道で落下点まで移動するのに要する時間だ。なので、機内食は比較的動きが穏やかで、乗員も仕事が少ないその時間帯に出されるのである。そう言う意味では、乗り継ぎ前に食事したのはちよつと失敗だったかもしれない。俺もちよつと今は入らない。いっそ、折り詰めにもしてもらって持って帰るか。

「お願いだから、持って帰るなんて恥ずかしいことは言わないでよね」

「あ、読まれちゃった・・・？だめかな。お弁当に・・・って」

「あのねえ、どこの世界に機内食を持ち帰るバカがいるのよ」

ケイも俺と同じ事を考えていたらしい。口に出さなかったのは正解だ。俺が言ったら、美月の突っ込みはこんなもんじゃないだろうからな。さて、そんな事をしている間に食事のサービスが始まる。

「こちらが本日のメニューでございます。和食もございますが、いかがなさいますか？」

アテナントさんが聞いてくれるのだが、どうやっても入りそうにないので、泣く泣くお断りすることにした。

「それでしたら、後ほど何か軽い物をお持ちいたします。お召し上がりになれるようでしたらおっしゃってください」

そう言つて、アテナントさんは爽やかな笑顔を振りまく。結局、全員が後で軽食をお願いすることにして、食事はパスした。

「さすが、ファーストクラスだね。対応が違うわ」

ケイがつぶやく。

「だよな。お客さんになつたつて感じがするよ。エコノミークラスはほとんど家畜扱いだし。

毎回ファーストに乗れるような身分だつたらつて思うよ」

「でも、あの時はケンジもファーストだつたわよね？」

脇から美月が突っ込んできた。

「あ、ああ。でも、あれは……」

そうだ。あの時は、たまたまオーバーブッキングで席がなくて、お情けでファーストクラスに座らせてもらったわけで。しかし、それはあまり美月には知られたくない。

「それに、あの時も食事断つて、何か軽い物を食べてたじゃない？」

こいつは余計なことをよく覚えている。あれも、もともとエコノミークラスだつたから、あ

の食事だったに過ぎないのだ。それを勝手に美月がダイエットかなにかと勘違いしただけである。

「そうだったかな。あまりよく覚えていないな」

と、ここはちよつと、とぼけておくことにしよう。本当のことを言うのは、かなり癪に障るから。とりあえずは適当にごまかして、俺は一眠りすることにした。サラウンドビューに切り替えると、地球を見下ろして浮かんでいる感覚だ。この場合、目をつぶれないので、眠るには少しコツがいる。意識を空の暗い方に向けておくのである。そうしていれば、いつしか眠ってしまう。サラウンドモードにはスリープサポート機能があり、意識が薄れるにつれて、サラウンドの画像も自動的に暗くなっていく。そしてサラウンドモードは眠ると自動的に解除される。目覚めたときにサラウンドのままだと、慌てて状況が理解できなくなる危険があるからだ。サラウンドのまま動いてしまうと、本当の周囲が見えなくて怪我をしたり、他人に怪我をさせたりする恐れがある。

俺は意識を、空を横切る天の川に向ける。美しい景色だ。そう言えば、昔、夏休みに親父と山に星を見に行った時もこんな天の川だったな。もちろん地球で見るよりも、こちらの方が数段明るく見えるのだが、心に残った風景は、むしろあの時の方が鮮烈だ。あれは、俺の原風景のひとつになっているのかもしれない。そんな事を、ぼんやりと考えている間に、俺は眠りに落ちていた。そして、ちよつと不思議な夢を見た。

どこかで見たことがある景色。空には天の川。手が届きそうな星の下で、俺は草原に寝そべっている。

「あれがアルタイル、そして、天の川を挟んで光っているのがベガ。その二つの星と大きな三角形を作っているのが、デネブ・・・」

そう誰かが言う声が聞こえるが、俺にはそれが誰だかわからない。どこかで聞いたことがある声なのだが、誰だか思い出せない。

「アルタイルは若き牛飼い。ベガは優しい織姫。でも二人の間には天の川が逢瀬を阻むように流れているんだ」

気がつくと、俺は空に浮かんでいて、目の前の天の川には、星たちが勢いよく流れている。向こう岸を見ると、明るく光る星の上に、少女が座っている。よく知っているはずなのに、名

前が思い出せない。彼女は、天の川の上流を見つめている。俺は、彼女の方に行こうとするのだが、流れが激しくて進めない。前へ進もうとするのだが、足が重くてまったく動けないのである。俺は向こう岸の彼女に知らせようとするのだが、声が出ない。彼女は、俺に気づかず、ずっと上流を見つめている。気がつく、そのまま時間が凍り付いたように、すべてが動きを止めていた。



どれくらい寝たのだろう。照明が落とされて薄暗くなった船内で、俺は目を覚ました。同時に俺は思い出す。そうだ、あの声は親父だ。子供の頃に、星空を見ながら星座や星の名前を覚えてくれた、あの時の声だ。そして、美月。向こう岸にいた少女は間違いなく美月だった。俺の子供の頃の記憶になぜか美月が溶け込んでいる。たぶん夢というのはそういうものなんだろう。過去から現在に至る記憶が混ざり合っている、今の自分の内面を見るようなものなんだから。俺は、ぼんやりとそんなことを考えながら、また目を閉じた。

次に目が覚めた時には、機内の照明が明るくなり、アテンダントが準備する軽食のおいが船内に漂い始めたころだった。俺は体を起こして思い切り背伸びをし、それからシーートの背を少し立てて、それにもたれかかる。隣の美月も目を覚ましたようだ。

「あんたのせいで、変な夢を見たじゃない」

体を起こしてしばらく、ぼんやりと前を見つめていた美月だったが、ぼさぼさになった髪を気にする様子も見せず、いきなり俺の方を見てそう言った。

「俺のせいって、そりゃ言いがかりだろう。それを言うなら、お前こそ俺の夢に出てきやがって」

「冗談じゃないわ。勝手に人の夢見ないでよね。どうせエッチな夢でも見てたんでしょ。この変態下僕」

「あのなあ。俺のは昔親父と見た星空の夢だったの。そもそも、どうしてお前がそれに出てくるんだ？」

「星空・・・って？」

なぜか美月は一瞬口ごもった後にこう続けた。

「そんなの知らないわよ。昔の夢に私を勝手に巻き込まないでよね。迷惑だわ」



「巻き込んだんじゃない。お前が勝手に入ってきただけだろう」

「おはより、今日も仲がいいねえ。ちよつと妬けるかなあ……」

いかげんわけわからん会話になり始めていたあたりで、ケイが目を覚まして割り込んできた。眠そうに大きなあくびをひとつ。いいタイミングだ。

「何をどう見たら、仲が良く見えるのよ」

「ほら、喧嘩するほど仲がいいとか言うじゃない」

「普通、仲のいい相手に、寝起きでいきなり喧嘩は売らんと思うけどな」

「で、喧嘩の理由は何だったのかな？」

「こいつが、私の夢を邪魔したのよ……って、あなたには関係ないじゃない！」

「へえ、夢に見るほど好きなんだ」

「違うわよ。誰がこんな奴！勝手に解釈しないでよね。こいつが出てきたせいで、せつかくの夢が台無しになったんだから」

「ふーん。で、どんな夢を見たのさ、美月は」

「あなたには関係ないじゃない。ほつといてよね」

「恥ずかしい夢？ あ、ちよつとエッチな夢とか？」

「あなたとは違うんだからね。なんで、私がケンジ相手にエッチな夢を見なきゃいけないのよ」

そう言いながら、美月は少し赤面する。そこで赤面されると、俺の方が少し恥ずかしいのが……。でも、それがどんな夢だったのか、俺はちよつと気になる。それに、お互いに夢に見るなんて、なんとなく……。いや、考えすぎだ。単なる偶然に違いない。忘れよう。

「皆様、おはようございます。機長です。当機は現在、地球低軌道までの降下を終え、大気圏突入の最終準備を行うと同時に、目的地への進入許可を待っています。予定では、一時間後には大気圏への突入を開始することになります。皆様にはそのまえに軽なお食事を用意いたします。眼下の地球の景色をご覧になりながら、お食事をお楽しみください」

そんなアナウンスが流れて、食事が配られる。前の食事を食べていないので、かなり腹が減っている。サラウンドでの大気圏突入はなかなかエキサイティングな体験になるから、その前に腹ごしらえをしておくでしょう。